

種子繁殖型イチゴの種苗コスト低減のためのランナー利用技術

野菜・花き部門 香西修志

1 背景

- ・ イチゴ栽培では苗の管理に多くの労力を要する。
- ・ 種子繁殖型品種では、購入セル苗の利用により育苗の省力化が可能である。
- ・ **しかし、種苗コストが高いことが課題**
⇒セル苗を本圃でランナー増殖させる技術の有効性を検証する。

省力的（育苗ゼロ）で収益性の高いイチゴ栽培

2 研究結果の概要

<試験区の構成>

区名	定植日	ランナー受け(期間)
4倍増殖区	7月11日	3本/株 (8月23日～9月4日)
2倍増殖区	7月19日	1本/株 (8月30日～9月4日)
直接定植区(対照)	〃	-

※供試品種：「よつぼし」406穴セル苗を本圃に直接定植
※窒素中断期間：9月9日～29日

<4倍増殖区の生育状況>



定植後
(7/11)



ランナー受け終了後
(9/4)

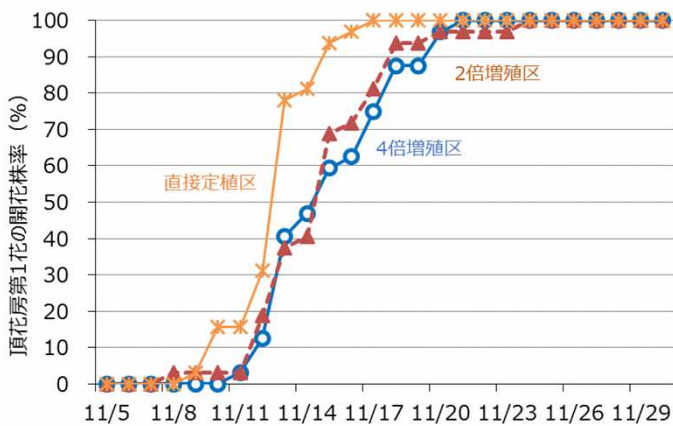


図 ランナー増殖数の違いが開花に及ぼす影響

直接定植区がやや早いですが、その差は2～3日程度と小さい。

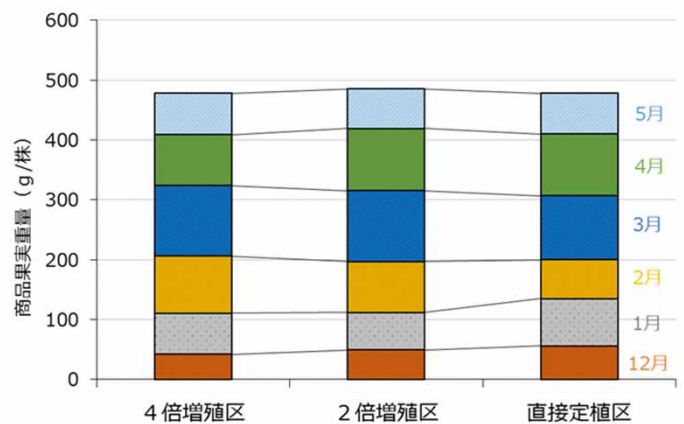


図 ランナー増殖数の違いが収量に及ぼす影響

初期収量は直接定植区が多い傾向。5月末までの総収量では同等。

3 まとめ

- ・ 生育や開花時期への影響は少なく、同等の収量が得られる。
⇒通常の本圃直接定植と遜色のない栽培が可能
- ・ 定植後にランナー受けの作業は増えるが、他の作業と競合しないため問題なく作業できる。
- ・ 種苗コストが1/2～1/4に削減できる。
⇒経営的に十分見合う栽培方法である。
- ・ 「よつぼし」以外の種子繁殖型品種でも同様な栽培が可能